様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３１日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22530857
研究課題名（和文）　教育空間の変容と自己形成の相互関係についての基礎的研究

研究課題名（英文）　The Basic Research on the Interrelationship between the Transformation of Educational Space and Self-formation

研究代表者
前平　泰志（MAEHIRA YASUSHI）
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：70157155

研究成果の概要（和文）：生涯学習の理念である、時間的統合と空間的統合の結合を現実のフィールドにおいて、統一的に把握する試みを行った。その結果、以下のような問題の抽出が可能になった。(1)地域教育空間の自律性の再構築、(2)「集合的記憶」の再構築、(3)「大学の知」の再文脈化、(4)「地域」概念の再検討、(5)地域の「再ローカリゼーション」

研究成果の概要（英文）：We totally essayed to apply in the practical life-world the concept lifelong learning which is totality of the temporal integration and spatial integration of the human being. In the end, we found 5 problematiques as the following way: (1) re-structuration, (2) re-structuration of collective memory, (3) re-contextualization of academic knowledge, (4) re-examination of the concept of 'community', (5) 're-localization' of the community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１２年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学、教育学
キーワード：ローカルな知、生涯学習、ライフヒストリー、再帰的実践

１．研究開始当初の背景

生涯教育（学習）とは、人間の生涯にわたる各時期における教育を関連づける垂直的統合（「時間的統合」）とあらゆる教育的機関を関連づける水平的統合（「空間的統合」）を包含する理念であるとして、一般に受容されている。しかし、この教育の時間的統合と空間的統合を包含するとはどういうことであるか、十分に研究されているわけではない。

たとえば、生涯学習のモデルのように取りあげられる「学校―家庭―地域社会」の連携協力の構図は、一方の極である、空間的統合の側面に焦点を当てたものであり、これだけを強調すると、個人の時間軸(歴史)の問題が等閑に付されてしまう。

他方で、個人のライフヒストリーの側面にばかり関心が注がれると、その個人の生活する空間はたんなる後景に退くことになり、「空間的統合」は、「時間軸」に従属してしまう。

前者では、子どもの教育という観点に焦点がおかれ、その観点でのみ地域の教育力や家庭の教育力が問題になるために、生涯教育の観点からみれば、生涯にわたる形成と自己形成といった個人の時間軸の問題が看過されてしまう。加えて、家庭や地域社会もまたそれぞれ固有の歴史＝時間をもっており、学校教育の補完でない教育的な影響を、文字通りその時々に応じて個人に及ぼしているという認識が薄らいでしまう恐れなしとは言えない。

成人学習の理論家達は、教室という空間を超えて、学習のさまざまな空間配置に言及し、その教育的な作用を再発見してきた。しかしながら、それは、空間の持つ一時的な教育作用に着目しただけで、空間もまた歴史という時間を持ちながら、個人の形成と自己形成の過程のなかで変容していくものだとするダイナミックな考えには至らなかった。

空間や時間の教育的な意味を問い直すという研究作業は、＜ローカルな知＞という概念に着想を得ながら、研究代表者なりの新しい解釈を加えつつ、学会を巻き込んで、5 年以上の研究蓄積を行ってきた。それは、2004 年の日本社会教育学会大会の公開シンポジウムを皮切りに、プロジェクト研究として 2007 年の研究大会まで、年 2 回のペースで 7 回にわたって会員、非会員を含む、生涯教育や社会教育の専門家、非専門家によって研究報告が行われてきた。また同時期に地方の研究会を地道に積み重ねながら、地域のなかで問題意識を暖め、共有してきた。その成果の一部は、日本社会教育学会の編集になる『<ローカルな知>の可能性―もうひとつの生涯学習を求めて』(2008 年) として結実している。

この＜ローカルな知＞の概念によって提起されるものは、単なる地域教育実践の掘り起こしにとどまらない。それは、学習者の学ぶプロセス（時間）と学ぶコンテクスト（空間）を統一的に把握して研究しようとする、生涯教育（学習）の原点に返るものである。本研究はこれを発展させて、人の意識変容は、その人が生涯にわたって形成と自己形成をとげていく空間と不可分の関係にあることを再認識し、人と空間の持つ絶えざる相互作用に着目し、具体的なフィールドにおいて、それを検証することを目指している。

２．研究の目的

生涯教育の理念であった、人間の生涯にわたる教育の「時間的統合」とあらゆる教育機関を関連づける「空間的統合」の包含の具体的な内実を、二つのフィールドにおいて分析することである。人が学ぶ内容や方法は、その人が生活する空間と密接に関連しているが、この空間は固定されているものでも、不変のものでもない。この学ぶ空間の変容につれて、その人がどのような形成と自己形成を遂げていくか、また他方で、その人形成と自己形成のプロセスが、同じ空間に所属する集団の形成と自己形成にどのような影響を与えるのか、という教育における時空間を統一的、相互規定的に捉える実証的な研究の推進の基礎を提供することを目的としている。

３．研究の方法

社会調査は、調査するものと調査されるものとが対峙して行う調査が一般的であるが、そのようないわゆる客観的な調査を排して、調査者が定期的にフィールドに関わり、時には地域の行事に参与しながら、聞き取りを行う調査活動を続けてきた。これを、「参与的客観化」(participative objecivization) と呼んだ。私たちは「地域課題」を掘り起こすアンケートを実施する際にも、調査票作成や予備調査の段階で、研究者側の問題設定を問いなおす作業に繰り返し取り組んできた。調査では「一番楽しい時間」が「畑仕事」である一方で、調査者が当初想定していた「生活の不便さ」は主要な問題ではなかった等、多くの気づきが住民との共同作業のなかでもたらされる効果があった。

４．研究成果

地域社会を取り巻く環境は、グローバリゼーションの一層の進行と自治体財政の窮乏化によって、不可逆的な限界集落化・コミュニティ解体の過程に入りつつある。京都府下、南山城村と沖縄農村部で試みられてきた研究の戦略は、以下の５点に要約される。

(1)地域教育空間の自律性の再構築

近代の共育空間が学校教育の他律的排他的空間を中心に同心円的に構築され、地域はこれを補完し、支える従属的な空間とされてきた。これに抗して例えば、学校的な教育空間の配置を極力避け、あえて非効率性や偶発性の余地を残すことによって、教育の意味の再構築を行ってきた。子どもの地域通貨の実践は、たとえ今なお萌芽的なものであろうとも、未来社会の関係のあり方を模索するひとつの社会実験である。

野殿童仙房生涯学習推進委員会では、活動の原則として地縁組織に拠らず「個人としての自発的参加」という、一般には都市型とされる活動形態をあえて取ってきた。これは教育「空間」を既存のコミュニティの人間関係・権力関係などからいったん切り離し、新住民や訪問者も含めて場所に関心をもつ誰もが対等に参加することを意図するもので

ある。その一方で地域の祭祀や共同作業（草刈やしめ縄づくり）に参加・調査を重ねる中で、地縁組織や伝統行事に内在する共同性や連帯に関わる知恵にも気づかされてきた。地縁組織はナショナルな統制と行政の上意下達の機関として桎梏になってきた歴史的経緯はあるにせよ、同時に異質性を受け入れ柔軟に変化する「創発性」の可能性ももつ。地域教育空間が「創発性」を生じさせるために、「個人かコミュニティか」の二項対立ではなく、排除と同質化を越えたオープンな関係へと組み替えていく戦略・方途が、研究課題となってきたのである。

(2)「集合的記憶」の再構築

また「地域課題」や将来像を考える上で、安易に成功例や理論に答えを求めず、思いが込められた重層的な「集合的記憶」を起点とした。それは単なる過去の思い出や事実を掘り起こす作業ではなく、ライフヒストリーを語る場を、聴くものと語るものとの相互の永続的な教育空間として位置付けることにあり、経験をふり返り意味づけることを協働で担うことでもある。

１０数年かけて、地域の人たちが伊勢神宮への参拝の傍ら歌い継がれてきた「伊勢音頭」を収集した地域住民がいる。地域によって、個人によって、微妙に歌詞やメロディーの異なる「伊勢音頭」を収集し、その音と文字を後世に残そうとしたこの活動は、伝統文化の保存という言葉で片付ける以上の意味を持っている。

それとともに「地域づくり」という大義のもとに、「専門家」が地域の人々の知らない／忘れていることを「教える」という、ある種の啓蒙主義も批判的に問い直してきた。そのため聞き取り調査も、単なるデータ・事実の収集としてではなく、人々にとっての「記憶の意味づけ」について掘り下げることへと転換した。それは個人にとっての過去の思い出の記録のみではなく、地域の生活空間そのものに込められた重層的な記憶をふり返り、共有・客観化するための研究活動として位置づけられた。そこで語られる記憶は地域空間と深く結びついたものであるがゆえに、「地域」そのものが人々の思いや感覚を深く刻み込んだ「空間の履歴」を有することにも気づかされた。その中には「開拓」等の地域のいわば大文字の「地域の歴史」だけではなく、女性たちの家族内での役割や、マイノリティの学校経験、新住民の地域社会との葛藤など、語られにくかった経験も数多くあることが明らかになってきた。「もう一つの歴史」としての人々の「記憶の場」から呼び起こし、繰り返し再編成（語り直し）される「集合的記憶」が生成する場として地域を位置づけなおすことを試みてきた。そのための研究者の役割は特権的に「地域に関する知」を所有／提供するものではなく、調査・研究を通じて対話的に知を紡ぎ出す有機的な媒介として再定義されるものだと考えるに至った。

(3)「大学の知」の再文脈化
　　―科学的合理性と社会的合理性

「大学の知」は、ローカル性を切り捨てることで普遍性や合理性を獲得し、それを開発主義的なモデルに変換することで、空間に君臨する支配的な知として機能してきた。だがこの知は、今日の複雑な社会や自然からもたらされている危機を解決するパラダイムになりえないことが、明らかになった。大学の知を支える「科学的合理性」によってしても、現在のリスク社会を生き延びるために対応しなければならない諸問題 ― 解決が未だ見えない問題、専門家の処方箋自体が異なる問題、解決それ自体が時間に委ねられる問題など ― は、生活世界の中では数多く存在している。そこでは、科学的合理性とは異なる、もうひとつの合理性、「社会的合理性」を差し挟むことによってしか、乗り越えることが出来ないのである。

この意味で、「リョウシさんから見た森・里・海のつながり」では、地元住民に継承された自然に関わる知恵からも学ぶとともに、フィールドからかい離した学問の限界をも問いなおす契機を提供している。

(4)「地域」概念の再検討

「地域」という概念は、土地・住民・人間関係・労働が一体となった均質で固定された共同体として自明視するのではなく、領域を越えた複数のネットワークの交差点としてとらえ直すことが可能であろう。また生涯にわたって、同一の地域の中で生まれ、育ち、死んでいく人々も、現在では多くない。Ｉターン、Ｕターン、Ｊターンなどと呼称されるように、生涯にわたる地域との関わりの多様性は、このことを示している。加えて、ある時期やある時点のみ、地域に関わる人々も存在する。従って、「野童いなか塾」では行政・地縁組織にはあえて依拠しない「個人参加」を強調し、また住民と非住民が相互に交流し学び合う空間を目指してきた。

(5)地域の「再ローカリゼーション」

社会教育において、「地域に根ざす」ことや「住民参画」に異論を唱える者はないが、「行政をつうじて／行政との関わりで」住民が学習すること自体は問い直されることは少なかった。戦後社会教育行政が果たしてきた大きな役割と、公的社会教育の防衛という実践的意味はあるにせよ、現在の「地域」を分析する上では研究枠組みとしては不十分と言わざるをえない。それは国家・行政が目

標と計画を立て絶えざる「開発＝成長(development)」によって、国民・住民の幸福を実現していくという「神話」が揺らいでいるにもかかわらず、それに代わる地域の「脱成長」のオルタナティブが不鮮明であることによるものと思われる。「脱成長」の戦略は閉鎖的なコミュニティへの回帰ではなく、むしろ行政や距離を越えて異質性をもとにつながる「インターローカル」なつながりを強化する。また近代の効率と成長を至上とは異なる「分かちあい・助け合い」のような価値を、現代の文脈で「再評価」および「再構築」しなおすことが不可欠である。

「開発＝成長」の視線は、我々の地域理解や生涯学習理念にも根強く内在しており、地域を国家・行政の一部分として切り取り、(「時計の時間」に対応した）他律的・非教育的な「地図の空間」とみなすことを自明視していた。これを乗り越えるためには人々の記憶・経験・感覚・期待などが重層的に埋め込まれた、固有の空間に文脈化された「ローカルな知」を見つめ、「生きられた空間」として地域を一から見直す作業が必要となった。一方でそれと裏腹に地域を理想化し、地域の閉じられた「空間・住民・コミュニティ・文化」を自明のものとして一体に扱ういわば「本質主義的」傾向も、私たち自身にも内在していることに気付かされてきた。そのため研究者が予断をもって「問題意識」や解釈枠組みを押しつける「空間のエスノセントリズム」を、個人の態度としてではなく方法論的に回避することを模索してきた。

これまで述べてきた「コミュニティの創発」「開かれた交流」「集合的記憶の再編成」「相互的ケアの再構築」は、いずれも空間に関わる人々が再帰的に「地域」を問い直すプロセスに他ならない。それは「脱成長」への価値転換において、地域空間の自律性の復権という「再ローカリゼーション」の戦略を練り上げることと不可分である。そこでの研究者の役割は、地域と学習者の「開発＝発達」の計画を特権的に示すという立場を「学び捨て(unlearn)」、被調査者の関係の中で自らの分析枠組みを問い直し客観化するものとなる。野殿・童仙房地区において現在我々が取り組んでいるライフヒストリー調査は、個人の生活史をデータとして採取するためのものではなく、地域社会調査と合わせて「地域」の理解・分析を不断に対話的に客観化するための作業である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①末本誠、「働く」若者の力―3.11 後の社会へ、月刊社会教育、査読無、2012 年 1 月号、2011、4－12
②末本誠、沖縄集落の日常的実践がもつ社会教育的意味に関する一考察：字誌の沖縄戦記録を手がかりに、神戸大学人間発達環境学研究科紀要、査読無、第 5 巻第 1 号、2011、39－51

〔学会発表〕（計５件）

①前平泰志、インターローカルな教育研究の未来をめざして、「実践知と教育研究の未来」公開シンポジウム（招待講演）2013 年 3 月 20 日、京都大学
②前平泰志、集合的記憶と教育空間―京都府南山城村野殿童仙房地域の総合的調査研究から（その 3)、日本社会教育学会、2012 年 10 月 7 日、北海道教育大学釧路校
③前平泰志、吉田正純、集合的記憶と再帰的実践―京都府南山城村野殿・童仙房地区の総合的研究から（その 2)、日本社会教育学会第 58 回研究大会、2011 年 9 月 17 日、日本女子大学・西生田キャンパス
④ Makoto Suemoto et Yasushi Maehira、L'expérience et la perspective historique des histoires de vie en formation au Japon、XVIIe symposium du Réseau québécois pour la pratique des histoires de vie (Association internationale des histoires de vie en formation)、2010 年 10 月 2 日、Base de plein air de Pohénégamook（カナダ）
⑤前平泰志・吉田正純・辻喜代司・安川由貴子、地域社会における集合的記憶の可視化と自己の形成―京都府南山城村野殿・童仙房地域の総合的調査研究から、日本社会教育学会第57回研究大会、2010年9月19日、神戸大学

〔図書〕（計１件）

①Coordonnés par Pascal Galvani [et al.]（Makoto Suemoto・Yasushi Maehira）、Moments de formation et mise en sens de soi、l'Harmattan (Paris)、2011、195－214・215－220

６．研究組織
(1)研究代表者
前平　泰志（MAEHIRA YASUSHI）
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：70157155

(2)研究分担者
末本　誠（SUEMOTO MAKOTO）
神戸大学・人間発達環境学研究科・教授
研究者番号：80162840

(3)連携研究者

吉田　正純（YOSHIDA MSASZUMI）
京都大学・教育学研究科・研究員（研究機関）
研究者番号：30547378
安川　由貴子（YASUKAWA YUKIKO）
聖母女学院短期大学・児童教育学科・講師
研究者番号：30452329